

令和 5 年度
横浜市立高等学校
及び
併設型中学校
学校関係者評価書

対象校：横浜市立横浜商業高等学校

調査全体の日程

調査日： 令和5年12月1日 ～令和6年3月31日

調査対象校：横浜市立横浜商業高等学校

調査チーム：学校運営協議会

大澤 正俊	横浜市立大学国際商学部 学部長
小山 巖也	関東学院大学 学長
日比野 幹夫	日本体育大学スポーツマネジメント学部 学部長
木村 大輔	明治学院大学国際学部国際キャリア学科 講師
岩田 力	太田地区町内連合会 会長
山崎 直宏	南区青少年指導員協議会 会長
岡本 和子	南区更生保護女性会
後藤 美香	横浜商業高等学校PTA 会長

本校担当者：校 長 小間物 晃弘

校長代理 杉浦 正典

副校長 西岡 健一

副校長 堀 慶司

記録等担当者：阿部 英俊、長尾 寛征

1 第4期横浜市教育振興基本計画の推進状況

□総合的な探究の時間の取組

成果	・横浜の魅力発信、課題解決という二つの取り組みを軸に、1年生の横断探究の授業を行った。企業とコラボした商品を、実際に文化祭で販売できたり、学科をこえて課題解決のアクションプランを考えたりすることができたことは成果であった。
課題	・企業や大学などとのつながりを持てたことは今後継続していきたい。ただし、担任とのつながりや負担感など課題もあった。
改善策	・令和6年度は担任が授業を担当することや授業内容を精選することで対応していきたい。 ・授業として実施しているのので、どうしても様々な場面で授業担当者への連絡で終わってしまうことが多い。探究学習に関しては、学校全体で取り組むことが重要なので、授業担当者以外にも報告の機会を増やし、情報共有を図っていきたい。

□魅力ある学びの創出に向けた取組

成果	【商業科】年間3回の講演会を実施した。いずれも魅力ある内容であり、生徒の今後の取り組みが期待できるものである。 【国際学科】社会課題に対して行動を起こせる人物の育成を目標に、講演会や課外活動、学科行事を行った。 【スポーツマネジメント科】講演会や講習、現場実習などを行うことにより、スポーツ業界に携わるということがより現実的に考えられ、明確な進路選択・進路実現が行われている。
課題	【商業科】PBLを取り入れた講演会等を企画したいと考えているが、時間的な問題などもあり、一般的なスタイルの講演会になってしまっている。時間と会場などを十分確保して取り組んでいく必要がある。 【国際学科】修学旅行など、海外への派遣が制限されている中で活動が制限されてしまうので、早急に再開をお願いする必要がある。 【スポーツマネジメント科】定期的実施している貴重な講演から主体的に学ぼうとする意欲が学年を追うごとに減少している傾向がある。幅広い分野から講演者をお招きし、少しでも生徒の興味、関心を高め色々な気付きができるように取り組む必要がある。
改善策	【商業科】商業高校としてその特徴を活かした様々なプログラムを構築していきたい。 【国際学科】海外だけでなく、国際交流行事を更に充実させ、国際人の育成により注力したい。 【スポーツマネジメント科】体育系・経済系の進路選択をする生徒が多いことから、学科の学びをさらに深めたい考えの生徒が多いため、対応していきたい。

□多様化する生徒への支援

成果	【商業科】生徒も多様化しているが、世の中も多様化している。一人一人の個性を伸ばしながら、個に応じた商業教育を行っている。 【国際学科】多様な生徒がいる中で、担任だけでなく国際学科の教員で一人ひとりに寄り添った指導を行っている。 【スポーツマネジメント科】多岐にわたる進路希望があり、スポーツに関わる仕事から公安の仕事、学校の先生などそれぞれの生徒に応じた指導を行っている。
課題	【商業科】現在の力をつけることも大切ではあるが、5年後、10年後にどう育っているかを考慮した教育を実施したいと考えている。検定の取得やテストの点数にこだわることなく、実社会を意識した教育内容を取り入れていかなければならない。 【国際学科】業務が忙しく、面談など時間の確保がかなり難しい現状である。生徒対応には時間が必要なので、学校としてその時間を確保する必要がある。 【スポーツマネジメント科】それぞれの生徒に応じた進路指導が必要であり、担任だけでなく学科として情報共有をしながらサポートをしていく必要がある。

改善策	<p>【商業科】生徒の成長において、大きく先を見据えた教育課程の構築や、教育内容を取り入れていく。全国でも最先端のそうした教育を実施している学校などを訪問し、優れたやり方を学んでいき、実践していく必要がある。</p> <p>【国際学科】学校行事予定表の中で、個別対応ができる時間の確保を要求していきたい。</p> <p>【スポーツマネジメント科】それぞれの生徒の進路実現にむけて最善のカリキュラムの構築や探究活動などを実践し、キャリアを形成できるように取り組んでいきたい。</p>
-----	--

2 教育活動の状況

□教育課程の状況について

成果	<ul style="list-style-type: none"> 多様な進路希望を実現できるよう、各教科の工夫により選択科目講座を充実させることができた。また、来年度の選択科目についてもより良いものにするため、議論の上追加・変更も行った。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 評価については依然教科間での情報共有に留まり、連携を取ることはできていない。また、教科で生徒の必要に応じて講座を設定した結果、科目数と教員の時間数がかなり多くなってしまった。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> 共有した情報を各教科で検討し、取り入れられるものは取り入れるよう検討していく。また、適切な評価の仕方についても今後より一層の研究を続け改善を図りたい。

□特別活動・部活動の状況について

成果	<ul style="list-style-type: none"> 各行事や委員会活動が円滑に進められるよう教諭、生徒会執行部、委員会生徒が連絡を密にし、連携して取り組んだ。 生徒会活動と部活動のバランスをとるために、生徒会執行部が会議の時間や方法を工夫し、部活動部員が委員会に参加できる体制を整えた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行部や委員会の中心生徒は自主的意欲的に取り組んでいたが、一般生徒や部活動部員の行事に対する温度差が課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> 生徒への周知の内容や伝え方を工夫し、行事や委員会活動への理解を図り、より多くの生徒（部活動に所属している生徒も含め）が行事や委員会活動に積極的に参加するよう促す。

□進路指導の状況について

成果	<ul style="list-style-type: none"> 3年生は6月の面談週間及び夏休みに担任の先生に面談をしていただき、生徒の進路希望、その実現に向けた取り組みを実施した。 学校名や偏差値などで進路先を選択する生徒が減り、学びたい、研究したいという内容から学校や学部学科を選択する生徒が増加した。
----	--

課題	<ul style="list-style-type: none"> ・面談週間では、担任の負担感が大きかったことが課題であった。 ・3学科4課程からなる本校において、進路支援は学科ごとに取り組んだ方が良いケースも多々存在する。ただし、学校全体で取り組むべきことも多くあるため、その住み分けがまだ不十分であった。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・面談週間を午前授業にするなどして担任の先生の負担を軽減していきたい。1, 2年生も引き続き、3年間を見据えた進路支援をしていきたい。 ・本校としての進路支援の土台や目標をしっかりとつくりあげていきたい。そのうえで、学科ごとの特色を活かした進路支援、進路実現を図っていきたい。

3 学校経営の状況

□教育目標等の設定・実施の状況について

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・グランドデザインやスクールミッション、スクールポリシーの実現に向けて、ビジネス教育や国際交流活動など、各学科で特色のある授業や取組が見られた。また、生徒、保護者、教職員とも活動のねらいについて概ね共有され、有意義な取組につながっている。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの結果には「あまり実現できていない」との評価も多く見られるため、教職員がスクールポリシー等の理解を深め、活動や取組につながりをもたせたり、さらに生徒に意識させたりすることが必要である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員がスクールポリシーを意識して活動や取組の計画を立てたり、教職員間でねらいを確実に共有したりする。 ・教職員一人ひとりがねらいを意識して生徒と関わったり支援したりし、生徒の活動後の振り返りを大切に次につなげられるようにする。

□組織運営及び教職員研修の状況について

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・分掌の業務については、主任の教員が見通しをもちリーダーシップを発揮したため、チームワークよく行えた。また、各学科の経営会議や探究活動運営委員会などを通して、縦や横のつながりを意識しながら課題について検討できている。 ・不祥事防止に加え、いじめや特別支援に関する研修を行い、これから増えるであろう課題に向けての意識付けとなった。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・教員による負担の偏りの解消や部活動関係の時間外勤務削減に向けて、より一層の検討が必要である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・分掌、学科、学年など、教職員一人ひとりが自分の役割を自覚して責任をもち、確実にやり遂げるようにする。 ・部活動においては、複数の顧問や部活動指導員を生かし、一人当たりの部活動に従事する時間を減らすことができるようにする。

□保護者・地域等との連携協力の状況について

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の評価は「そう思う・ややそう思う」を合わせると86%に達しており、学校や学年からの情報提供や、担任との連携について、おおむね満足しているという結果が得られた。ただ、教員の評価については50~60%という数値であり、保護者と教員の認識に差があることがわかった。
----	---

課題	<ul style="list-style-type: none"> 各学科が特色のあるカリキュラムで教育活動を行っているが、その取り組みや成果を教員間で十分に共有できていないことが課題である。 コロナ禍の影響で、地域との連携や協力が希薄になっている。 勉強や部活等で高校生も忙しく、地域と関わる時間を持つことができない。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> 業務が多岐にわたり多忙ではあるが、情報共有ツールを活用する等して、教員間でそれぞれの取組を発信・共有できる機会や場を増やしていく。 教育活動の中で地域と関わる機会を増やしていく。 地域でのボランティア活動について、学校側から情報を積極的に発信していく。

4 いじめへの対応に関する項目

□いじめへの対応について

成果	<ul style="list-style-type: none"> いじめ解決のアンケートでは、単に数字を計るのではなく、少しでも心配なことがあれば相談してほしいということを生徒に伝え、生徒が安心して生活が送れるように取り組んでいる。 学校を休むことになった生徒に対しては、授業担当者に課題を準備してもらおうなど、学校と同様に授業の内容に取り組めるようにした。
課題	<ul style="list-style-type: none"> 学校としての相談窓口やスクールカウンセラーの利用については伝えてあるが、生徒や保護者が気軽に足を運べるようなものとは捉えられていないのではないかと。 どのような趣旨の課題を用意すればよいのか担当者が悩む場面があった。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> 悩み事の大小問わず、生徒との日常的な会話から引き出せるような場所と雰囲気を作ることも必要と考える。 科目担当任せにせず、目的を決めたうえで、それに沿った課題を用意してもらうようにする。

5 学校関係者評価 提言（380字以内）

総合的に見て、令和5年度の学校の取組は生徒本位のものとなっており、生徒は学習や特別活動、部活動に概ね積極的に取り組んでいる。保護者も学校を信頼し、生徒への支援を適切に行っているように見受けられる。

新型コロナウイルス感染症流行以降、人との関わり方が変化し人間関係がうすくなった感じがあり、思いやりを大切にしたい自己肯定感を高める視点での教育が必要だ。教育活動の課題を洗い出し、ESDの実践により探究的な学習と主体的な学びを中心とした具体的な対策を立て、目標が達成できるよう教科間で連携して取り組んでほしい。

生徒一人ひとりに合った指導を継続し、保護者への明確な説明で理解度を高め、地域と連携して生徒が関われるような環境づくりをお願いしたい。

引き続き取り組んでいただくとともに、AI導入やデジタル化により教職員の勤務の負担軽減を行い働き方改革が進むことを願っている。